



ある死刑囚との対話

加賀乙彦

弘文堂



ある死刑囚との対話

加賀乙彦



弘文堂

著者紹介

加賀乙彦（かが・おとひこ）

1929年東京生まれ。東京大学医学部卒。精神医学・犯罪学を専攻。
東京拘置所（医務部技官）勤務後、フランスへ留学。帰国後、同人誌「犀」「文芸首都」に短篇を発表。東京医科歯科大学助教授を経て、上智大学教授。1975年上智大を辞し文筆に専念。

現在 小説家、精神科医

本名 小木貞孝

著書 『フランドルの冬』（新潮文庫）

『荒地を旅する者たち』（新潮社）

『帰らざる夏』（講談社文庫）

『宣告』（新潮文庫）

『錨のない船』（講談社文芸文庫）

『湿原』（新潮文庫）

『岐路』（新潮社）

『犯罪ノート』（潮出版社）

『死刑囚の記録』（中公新書）ほか

ある死刑囚との対話〔叢書 死の文化 10〕

1990年3月10日 初版1刷発行

©著者 加賀乙彦

発行者 鯉淵年祐

株式会社 弘文堂

101 東京都千代田区神田駿河台1の7-13

TEL 03 (294) 4801

振替 東京 2-53909

ISBN4-335-95024-1

Printed in Japan

印刷・図書印刷

製本・校製本印刷

まえがき

ここに集められたのは、死刑囚Aと私との間に取り交された往復書簡である。一九六七年八月一日から六九年二月七日まで、つまり彼が処刑される前日までの二年四箇月間のものである。

六七年の八月と言えば、Aは、五三年一〇月に強盗殺人犯として逮捕されてから、すでに十四年間も獄中にあり、六三年一月の最高裁の最終判決で死刑が確定してからも六年を経っており、いつ処刑されるかわからぬ日々を巣鴨の東京拘置所（現在のサンシャインシティの場所にあつた）で送っていた。

また、私は六五年四月から東京医科歯科大学犯罪心理学教室の助教授をしており、犯罪学の研究と教育にたずさわるかたわら、小説を発表し始めていた。

この往復書簡集は、一九六七年八月に上梓された私の最初の長篇『フランドルの冬』をAに送ったときに始まり、私が六九年四月上智大学文学部心理学教室の教授となつてから

八箇月後、Aの突然の処刑で中断されている。つまり、Aという死刑囚の最晩年と私という小説家が発した最初のころが交叉している。

この期間、二人のあいだには集中して手紙の取り交しがあつたが、実は私がAと知り合ったのは、もつと以前、一九五六年の四月、私が東京拘置所の医務部に医官として勤めていたときであつた。

ほんの駆け出しの精神科医として、私は二千人余の収容者を持つ拘置所で多忙な毎日を通じていた。拘置所の一角には死刑囚を収容する「ゼロ番区」（収容番号の末尾がゼロの重罪犯の監房区）があつた。死刑囚のあいだに拘禁ノイローゼが多いため、私はしばしばゼロ番区を訪れているうち、ある日、Aの名札を扉に見出して訪ねてみる氣になつた。

独居房の鉄扉を担当看守が開くと、縁無し眼鏡をかけた色白の青年が、いぶかしげな眼付きで顔をあげた。「きみと話をしたくて来たんです。いいですか」と私が言うと、「どうぞ」と笑顔になつて、自分が机がわりにしていた布団を、座布団として私に差し出した。彼が読んでいたのは、カレルの『人間この未知なるもの』であつた。

独居房とは三畳間ぐらいの細長い空間で、窓のあたりの板の間に衣裳戸棚、洗面所、便器が並んでいた。洗面所は板蓋をかぶせれば机に、便器は板蓋を閉めれば椅子となる。奥、つまり廊下寄りには二畳ほどの畳である。Aは窓側の板の間を「洋間」、畳の部分を

“日本間”と呼んでいた。

そこは死刑囚を閉じ籠めておくために特別に工夫されて作られたコンクリートの箱であつて、窓には、囚人が直接手でガラスに触れられぬように金網が張つてあり、天井の電球も、囚人に割られぬよう金網で覆われていた。鉄扉には、上のほうに覗き窓（囚人用語でシキテン窓）がうがたれていて、廊下から担当が蓋をあけて中を“視察”できるようになつていた。鉄扉の下のほうには、食事や書類の受け渡しなどをするやや大きな目の穴があつた。

房内に入ると、狭い壁の圧迫感とともに、ここに監禁されたら、絶対逃げられないという強い実感が迫ってくる。鉄扉を通して、廊下を歩く看守の足音が、権力者の代表が自分を支配しているぞと絶えず告げるように、響いてきた。

Aの独居房を私がなぜ訪ねたか。それは彼に対して私がいささかの興味を持っていたからだった。

彼が犯した強盗殺人事件は、一九五三年七月のことである。大学を出て、ある証券会社に勤めた彼は、金融業兼証券外務員Hを、あるバーに誘いこみ、共犯二人とともに殺害し、現金四十万円を奪った。主犯として指名手配されながら逃走し、一〇月に京都で逮捕された。

東京まで護送される電車内で、彼は、罪の意識などかけらもないとうそぶき、新聞記者たちを啞然とさせた。一九二九年生れ、つまり私と同年の青年が、大学を出ながら罪悪感をすこしも持たずに殺人をおこなったということが、私の魂を震撼させた。

一九五三年と言えば、戦後まだ十年を経っていない時期であった。街に戦争の廃墟が残っていたように、私の心にも敗戦で受けた心の傷が癒えずに残っていた。一口に言えば、それは人間不信、とくに、自分に軍国主義を教育し、いっぱしの軍国少年に育てあげた大人たちへの不信の念であった。Aの車内での言動に、私は、まさしく自分と同じ人間不信を見出した。自分の犯罪の動機は、「進んで破壊を求めたのです」と、上告趣意書に彼自身が書いている。「大人」といわれるひとたちをこころから憎み、怖れておりました」「大人」はずるくて、薄情で、残虐で、嘘つきで、エゴイストなんだ。私の、この拭い難い不信と憎悪の対象である「大人」の中に、たまたまHさんがおいでになっただけでございます」とも書いています。

しかし、Aは、獄中でキリスト教の信仰に目覚め、カトリックのC神父の手で洗礼を受ける。それは一九五五年七月のことであった。C師との出会いが、一人の不信の徒を神の愛に目覚めた信仰の人へと百八十度の転換をもたらした。そして、私がAに会ったのはその翌年、すでに彼が敬虔なキリスト者となっていたときであった。

私は市ヶ谷の日仏学院でC神父からフランス語を習ったことがある。Aに会った最初から、C神父が共通の思い出となった。また、以前私が研修生として過ごした松沢病院で彼が精神鑑定を受けたこと、鑑定医が私の犯罪精神医学の恩師Y先生であったことなどから共通の知人がつぎつぎに話題となった。

死刑囚には、迫り来る死の恐怖に耐えられず、拘禁ノイローゼにおちいつている人々が大勢いた。精神科医としてそういう患者たちを往診するついでに、私はAの房をしばしば訪れ、話し込むのだった。ほかの死刑囚が不安動揺し、奇妙な種類のノイローゼを示す人々が多いのに、Aは、いつも冷静で、しかもにこやかであった。一九五六年一月一日、東京地裁で死刑の判決がおりた直後も、別に不断と変った様子はみられなかった。

一九五七年の四月末で私は東京拘留所をやめ東大病院精神科助手となった。そして九月、フランスで精神医学を勉強するため旅立った。私が帰国するのは一九六〇年三月で、そんな事情からAとの交際は一時とだえてしまった。一九六四年から六六年にかけて、Aは死刑囚の獄中手記を「犯罪学雑誌」に連載し、そのころ同雑誌の編集にたずさわっていた私は、Aと事務連絡の手紙を頻繁に交すようになった。この手記は、六七年七月、『黙想ノート』として刊行された。

ところで私がAと、事務連絡のほかに、もうすこし濃密で個人的な手紙を交すようにな

った切っ掛けが私の処女作『フランドルの冬』の出版であった。文学を通じて、二人の心に何かが働き、心がより深く通い合うようになったのか、それとも今はキリスト者となつた私の言い方によれば、神のうながしがあつたのか、理由はわからない。突然彼は私に熱心に書き始め、私もそれに答えていく現象が生じたのだつた。

今、二十年経つて書簡集を読み直してみると、彼がすでにキリストの教えに従つて立派な信仰者として立つていたのに、私は神へのあこがれを心に抱きながら、その一步手前で立ち止まっていた有様が読み取れる。また、死刑囚として、処刑の恐怖を前にしながら、彼が過酷な現実にめげず清朗な思索の毎日を生きている事実にあらためて感嘆するとともに、私が抱いていた小説家としての初心や、やや青くさいながらも理想を追っている姿に懐しい思いもする。

この書簡集は、人間の記録として、何ら手を入れず、当時の文章のままに発表することにした。個人的な手紙のため、状況が分りにくいところにはなるべく注を入れたり、現在の私の感想を書き加えたりしたが、本文はあくまで、生の往復書簡で、それ自体を読み取っていただければと願っている。

一九六七年八月一五日

K先生

前署 先日来、『黙想ノート』⁽¹⁾のために沢山の御力添えをいただいたK先生に御礼状を出ししなければと思いつつ、初夏以来とりかかっていた大事な原稿に忙しくて、つい心ならずもそれが遅くなっていましたところへ、今朝、『フランドルの冬』をお送りいただき、恐縮しながらも嬉しゅうございました。この書名は最近特に心を引かれており、近く求めたいと思っていたのですが、それというのも、題名が近頃の本にない詩情をたたえているからでした。

本を開ければ、初めに私への献辞を著者がお書き下さっているのも嬉しく、はてしとし、この方がどうしてK先生を通して私に御著書を下さったのだらうと訝りながら、巻末の著者の略歴を見て、本当に驚きました。

加賀乙彦という新鋭作家とはK先生その方だったのですから！

先生、処女作の御出版、おめでとうございます。埴谷雄高さん⁽²⁾は、私がかねてからひそかに尊敬申上げている方ですが、ゆきづまりを見せている日本の現文学界に於て此の御作品は、確かに一つの方向を示すものでしょう。最近では大江健三郎さんの『万延元年のフットボール』が唯一の緊張をもたらす作品に思えますが、今ここにK先生の秀作を手にすることが出来て、嬉しく思っています。皆さんにもうんと言弘め、読むようにすすめるつもりです。

あとになりましたが、『黙想ノート』のことでは、お忙しいにも拘らず、特にこのような長篇を御執筆中だったのに、ノートを原稿に移写するなどはじめ、多大の御尽力を私のためにして下さいましたことを、改めて深く御礼申上げます。どうぞ私が一層謙遜な心で生きてゆけるよう、お祈り下さい。一九二九年に先生と同じく生を享けながら、このように恥すべき状況に在って生き続けることに、時々、いいしれぬ自己嫌悪を感じますが、生きていられることで先生方の恩愛に接することも出来るのだと明るく考えて、今日も第一義のことに目を注いでいたいと、しみじみ望んでいます。ではまたそのうちに――Y先生にお会いの折は、くれぐれもよろしくお伝え下さい。今日は本当にありがとうございました。御清健をお祈りしつつ。

A
(1)『黙想ノート』は、一九六七年七月にAがみず書房から出版した獄中日記であ

る。現在絶版で入手困難。

(2) 埴谷雄高氏は、私の『フランドルの冬』の帯を書いて下さった。

一九六七年二月一日

A様

この前は拙著をお贈りしたことについて御懇切な御返事をいただきありがとうございます。また、『黙想ノート』の印税を犯罪学会に御寄付下さるとのこと。その御志にも感謝いたしております。

まず用件から書きますと、あなたの上告趣意書を「犯罪学雑誌」に連載するようM・Y両先生から命じられ、今原稿用紙に書きうつしているところですが、これを出版するときの副題で何かよい題がないでしょうか。私としては前の『黙想ノート』や『エルゼとともに』のようなしやれた題があればと思っています。内容からいうとあなたの生いたちと犯罪についてのもののなので、『罪と愛』『暗い心』など考えてみましたが、ぴったりしませんでした。ついでにいえば、この文章は今まであなたが書かれたもののなかで、もっとも犯罪の核心に正面から立入ったものとして迫力もあり説得力もあり、文学としてもすぐれたもの

と思っています。

『黙想ノート』についての感想などものべたいし、それからあなたの小説『サハラの水』を読んで感心した話もしたいし、考えてみると、こんな事務的な用件のみでなく、あなたとはもつと魂の奥深いところで対話をしたいと考えております。

文章を書くという点ではあなたと私とは全く対等ですし、人間実存の認識についての志向も似通っていますね（これは私の勝手な断定）。それから私は一九二九年四月二日生れ、たしかあなたとは三日ぐらいしか誕生日が[↑]ちがわぬはずです。

K

（一）誕生日——Aは一九二九年四月一九日生れ。

一九六七年二月四日

K先生

前署 御手紙をなつかしく拝見しました。先生がたのおかげで、『黙想ノート』の印税を有意義にお使い頂け、心から感謝申し上げます。母や兄たちにも早速伝え、共に喜んでもらいました。

さて、引き続き趣意書についても原稿に書きうつし下さっているとのこと、本当にい

ろいろ御助力下さいまして、ありがとうございます。大学での教授をはじめ、御創作などで、さぞかしお忙しいことでしょうに……と恐縮しております。

題について、一と晩中、あれこれ考えましたが、あれは純然たる文学作品ではありませんので、いわゆる「文学的な」題名は避けたほうがよいのでは、などと、とつおいついた末に、これならと思いついたのが、『夜のかけ橋』^④でした。

本来なら『夜』としたいところなのですが、最近みず書房から同じ題名の作品が出たようですので遠慮しました。その他『夜の子』『夜の虹』『夜から』『やみの奥から』等々も考えました。私としてはあれが長い作品ではないので（正しくは「作品」と呼ぶべきではないでしょうが）或は、『夜から』^⑧とした方がいいか、とも考えたり、しています。^④^⑧どちらでも、先生が良いと思われるほうをつけて頂けたら、幸いです。（^⑧のほうがよさそうですね……）

とにかくあれは、先生の仰有るように、その本来の目的から、罪の本源へ目をそらさずに近づいたという点で、私にはこの上もなく辛い内容を含んでいます。そのような事に触れるのがあれだけであるのは、いうまでもなく、余りにも深く心に突きささるためです。破壊された私の愛、私が破壊したHさん^①をはじめ、いくたの愛と、それらの凡てのすくいを思うたびに、私は深い沈黙に閉ざされてしまいます。

私にとっては、趣意書にありますような愛とは信じることであり、従って十分に信じる
ことこそ、眞の愛を知ることと同意義にもなるわけですが、今でも時々、

“人が、何かを、信じる”

という一文が持つ、全人格的な背景の故に、深い神秘を、いいかえればその周囲に広がる
濃い闇を、感じます。

尤も、正確に言えば、ここにいる“感じる”というコトバは、マルセルなどがよく云
う、“秘義を感じる”というほど、高い次元のものとは到底、うぬぼれることは出来ませ
んが、カトリックの神秘神学者たちがたえず、人間存在の闇を知ることこそ、〈神の闇〉を
知る唯一至高の手掛りだ、といってくれますので、すこし安心したりもしています。

私のほうこそ、魂の（又は心の）問題について、今後とも先生との対話の時を、このよ
うな手紙によって、持ちたいと望まずにはいられません。死の時はいつか、明日か、分り
ませんが、健在でいる間は、ますます内に深められたいものです。

ではまた。

A

（1）Hさんは一九五三年七月二七日、Aが四十万円奪うために殺害した被害者である。
別に残された『日記』によると、AはHさんのために常に祈っていた様子がうかがえる。

一九六七年二月一七日

A様

お手紙拝見しました。すぐ御返事をお願いながら多忙にとりまぎれ失礼しました。

趣意書の題は『夜より』がよいと思います。『夜のかけ橋』はあまり感心しません。内容にぴったりとしていますね。Y先生もそれでよいとのことでした。原稿用紙に浄書したら四〇〇字詰で五一枚になりました。したがって三回にわけて連載ということになります。世に出るのは今年の一二月から来年二月よりということになるでしょう。

夜より、深い夜から、深淵より……あなたの思惟の核にあるこの闇黒の世界が私には見えるような気がします。その闇の濃くひろがったなかに、何かが光り、人間をして人間たらしめているのでしょうか。その何かは神なのかもしれませんし、ハイデガーのいう存在 Seinなのかもしれませんし、もっと倨傲になれば私たちの精神や意識なのかもしれません。大切なことは、光のみをみつめる——世の多くの人々はそうだと思っています、凡俗なる人の目——ではなく、光と闇、むしろ闇の中に光をみつけることでしょう。私にはどうもそう思えるのです。これはけっして抽象的な思惟の果てにえられた空論などではなく、まことに具体的な感覚なのです、生活なのです、毎日世界をみる目なのです。

『フランドルの冬』という作品の中で私が目差したのも、そのような人々のあり方です。

た。光しかみえない迂闊な人と、闇をみつめうる人と。前者は世人であり、幸福な人であり、後者は異邦人、はじきだされた人、不幸な人です。私ののぞみが、というより私の関心のすべては後者にあります。

なぜに、この世の闇は濃いのでしょうか。神がないから、神が死んだからというニイチエの叫びは、深いニヒリズムを私たちに残しましたが、このニイチエのニヒリズムを克服する手だてを、私たちはまだ持っていないのです。おそらく、世界中の哲学者の誰もが、まだこの手だてを、人々の解放されていく方角を示せないでいます（少なくとも私の知るかぎりではそうです）。早い話が、十九世紀のヒューマニズムや科学精神は沢山の植民地戦争や不幸をつくりだただけだったし、マルキシズムも本当に幸福な国をつくりはしませんでした。さて宗教はどうか。これについては私には語る資格はありませんから沈黙いたします。むしろいろいろとお教え下さい。

いずれにしろ、人々のおちこんでいるにせの光の世界、心ある人々の濃い闇の世界、この二つの世界の人々が相互に無関係に生きている、これが現代の世界でしょう。おたがい相手を知らず異端者あつかいにするのです。

ではどうしたらよいか。その一つの道が、表現の世界でしょう。闇の中から光のほうに手をさしのべるのです。私の文学への執心はここから来ます。そのためには、評論よりも